

6. 千々石ミゲル妻墓所出土遺物について

後藤晃一

千々石ミゲル妻墓所出土遺物の遺物構成は、ガラス板、ガラス玉、わずかな繊維質物質、そして紙かフェルトのようなものからなる。この遺物がキリスト教関連遺物であるかどうかを検証するために、大きく2つの視点から考察することとする。

一つは現存しているキリスト教信心具が、仮に千々石ミゲル妻墓所出土遺物と同じ環境下で発見されたとした場合に、どういった形で残りうるかを検証する。もう一つの視点としては、個別の遺物の中でも、特に特徴的なガラス板に焦点をあてて検証することとする。

(1) 類例資料の検証

まずは千々石ミゲル妻墓所出土遺物と同じ出土環境下に置かれた場合に、同様なものが残存する可能性のある、キリスト教信心具の類例を見ていくこととする。神戸市立博物館所蔵の福井医家伝世資料の中に可能性の高い資料があるので、それについて見ていくこととする。

1) 神の子羊図聖牌①・②（神戸市立博物館所蔵）

アニウス・ディと呼ばれる神の子羊を象った聖牌である。ガラス板の中は蠟で作られていると考えられる。周囲は、2, 3種類の大きさの黒のガラス玉が多数つながれており、それによって装飾されている。

(1) については、蠟に象られた像が鮮明でないため、はっきりとは分らないが、恐らく子羊と無原罪の聖母が象られているものと考えられる(図6-6-①~③)。周囲は大きく2種類のガラス玉で装飾され、ガラス板の周囲を取り囲む23個の玉(中サイズ)と、さらに小さい直径1mmほどの多数のビーズ玉(小サイズ)から構成される。この中サイズの玉は、2.5mm ~ 3.0mmほどの範囲のサイズ幅がみてとれる。中サイズの玉は両面で46個、さらに周囲にも確認できるので、全部で50 ~ 60個ほどあったと考えられる。因みに、この千々石ミゲル妻墓所出土ガラス玉は直径3.0mmであり、この中サイズの玉に近い。しかし多数見られる小サイズの玉は、千々石ミゲル妻墓所出土ガラス玉にはない。

この資料が仮に千々石ミゲル妻墓所のような土中に置かれていたとすると、まず中の蠟製品は残存しないであろう。またビーズ玉をつなげていた糸、繊維も残りにくいであろう。推定千々石ミゲル妻墓所では繊維質のものがわずかに確認できているので、一部は残るかもしれない。

したがって、この資料が土中で残るとしたら、楕円形のガラス板とガラス玉ということになる。

(2) については、資料の保存状況から片方の面しか調査できなかったが、蠟に象られた図像は、神の子羊の像がはっきりと確認できる(図6-6-2)。

ガラス板の周囲には大きく大・中・小の三種類のサイズのガラス玉が巡る。大サイズのガラス玉は目視できる範囲で聖牌の側面に32個確認でき、ガラス板の縁を巡るように小サイズと中サイズのガラス玉が多数配されている。ガラス板の内側には、青色と金色の紐状のものが交互に撚られてめぐる。

この聖牌が仮に千々石ミゲル妻墓所のような土中に置かれていたとすると、①と同様に楕円形のガラス板とガラス玉が残ることになる。



図 6-6-1-①



図 6-6-1-②



図 6-6-1-③

図 6-6-1-①、②、③ (1) 神の子羊図聖牌
(神戸市立博物館蔵)



図 6-6-2 (2) 神の子羊図聖牌
(神戸市立博物館蔵)

2) 笞打ちのキリスト図聖牌 (神戸市立博物館所蔵)

長径は、上部のリング部分まで入れると 4.5cm、本体部分では長径 4.25cm、短径 3.3cm である (図 3)。周囲を糸状のもので装飾し、「笞打ち」キリスト図を描いた銅版画が詰め込まれている。銅版画は上にガラス板がかぶせられているが、割れており、半分ほど欠損している。ガラス破損の時期は不明であるが、当時から一部欠損していた可能性もある。

周囲の装飾部分については、約 2.5mm の青色ガラス玉が側面に 24 個、同じく青色のガラス玉が、ガラス板の周囲に 24 個確認できる。側面のガラス玉とガラス板周辺のガラス玉は同サイズ、同色、同種のガラス玉と考えられる。また周囲と側面の青色ガラス玉の間をつなぐように、灰黒色のリング連結状の装飾が糸を覆っており、その数は、やはり同じく 24 個である。聖画を覆うガラス板が破損しているために、裏返すことができず、裏面については不明である。

ガラス板の正確なサイズは周縁部が装飾の下にはめ込まれているため不明であるが、長径 3cm、短径 2cm ほどと考えられる。

この資料が仮に千々石ミゲル妻墓所のような土中に置かれていたとすると、まず中の銅版画は残存しにくいであろう。また周囲を装飾していた糸状の繊維、ビーズ玉をつなげていた糸等も残りにくいであろう。ただ、千々石ミゲル妻墓所では繊維質のものがわずかに確認できているので、一部は残るかもしれない。また、糸を巻いた灰黒色のリング連結状の装飾については、その素材が不明なために、残存の可能性は推測が難しいが、金属であれば残るであろう。

したがって、この資料が土中で残るとしたら、楕円形のガラス板の破片と青色のガラス玉および灰黒色のリング連結状の装飾ということになる。

以上、神の子羊図聖牌①・②、笞打ちのキリスト図聖牌が千々石ミゲル妻墓所と同じような環境下で発見されたとすると、ガラス板と複数のガラス玉、繊維質のものが残るという点で合致する。ただ神の子羊図聖牌①・②については、2.5mm ～ 3.0mm の中サイズの玉については、大きさ形態ともに千々石ミゲル妻墓所出土遺物と一致するが、他に多数の小サイズの玉が残るはずであり、その点で異なる。また、中に入っているのが蠟で象られたものであり、紙などは残らない。それに対して笞打ちのキリスト図聖牌については、玉のサイズも近く（図 6-6-4）、数も見えているだけでは 48 個、裏は不明だが、仮に同様にあったとしても千々石ミゲル妻墓所出土遺物と大きくかけ離れるものではない。しかもガラス板の下には銅版画の聖画が入れられており、千々石ミゲル妻墓所出土遺物に紙のようなものが残っている点と符合する。したがって千々石ミゲル妻墓所と同じような環境下で発見された場合は、笞打ちのキリスト図聖牌のようなものが可能性として考えられる。



図 6-6-3 笞打ちのキリスト図聖牌
(神戸市立博物館蔵)



図 6-6-4
玉のサイズ比較

左：千々石ミゲル妻墓所
出土遺物
右：笞打ちのキリスト図
聖牌

(2) ガラス板の検証

まず、日本二十六聖人記念館に所蔵されている大分市丹生出土のガラス板についてみる。

昭和 40 (1965) 年、大分県大分市の丹生台地小原地区の畑で、高さ 27cm、口径 11cm の備前焼の壺の中に入った状態で発見された資料である。壺の中には、このガラス板 2 枚以外に、木彫「聖母子」1 点、黒檀製像十字架のキリスト 1 点、木製のロザリオの珠 3 組、真鍮製十字架 1 点、箱付きの真鍮製十字架 1 点、メダイ 9 点、嵌め込み型のメダイ 1 点、ホステアが 1 点入っていた。壺は備前焼で玉縁状の口縁部を有し、頸部は短く直立する。頸部直下には 4 か所に耳がつく。また肩部から胴部上半にかけてヘラ描きによる記号が見られる。

これらに資料の中でも特に注目されるのは、フランシスコ・ザビエルとイグナティウス・デ・ロヨラを表裏に描くメダイである。ザビエルの銘が「B.Fran・・・」と「B」で始まっており、聖人ではなく福者 (Beato) を表していることがわかる。ザビエルが副者であったのが 1619 年～ 1621 年の間であり、よってこのメダイが丹生にもたらされたのはそれ以後に位置づけられ、同じ壺の中に入っていた他の資料もすべて近い時期のものである可能性が示唆される。よって、千々石ミゲル妻墓所出土遺物と時期的には近い (ミゲル夫妻没年 1633 年) と考えられる。

この丹生の資料は、聖遺物入のガラス板と理解されていたが、聖遺物入であれば通常は金属でできており、その金属部分が確認できていない。前述の神戸市立博物館で確認した聖牌はガラス板の周囲が金属ではなく刺繍など繊維質のものが確認できており、丹生のものもこうしたものであった可能性がある。

ガラス板はいずれも長径 3.4cm、短径 2.6cm で同サイズである (図 6-6-5・6)。さらに両者ともに縁辺部を押圧剥離で楕円形に成形している。その結果断面が台形状の形態をなしており、一方の面がわずかであるが広がっている。つまり、このガラス板には、平らで若干面積が広い面と加工痕が残る面積が狭い面の上下が存在していることを意味する。今後は面積の加工痕の残る狭い方を上面、平らで広い方を下面と呼称してすすめる。(1) のガラス板は、上面に楕円状に紙か繊維のようなものが付着している (図 6-6-2)。一方下面にもやはり若干弧を描くように、着色された紙か繊維のようなものが一部に付着している (図 6-6-3)。(2) のガラス板については、上面には若干の汚れのようなものが見られ (図 6-6-2)、下面には紙のようなものが弧を描いて付着している (図 6-6-3)。

こうしたガラス板の形態をなし、紙や繊維質のものが付着する可能性のものとして考えられるものに、前述のような聖牌もしくは聖遺物入がある。そこでいくつか類例を検証してみることとする。

(3) は、磔刑のキリスト図 (片面／神の子羊図) 聖牌資料で (図 6-6-7 ①)、神の子羊図の方にわずかであるが、ガラス板の縁辺部が確認できる。見えるところに関しては、縁辺部が複数の剥離痕が認められ (図 6-6-7 ②)、これも同じ押圧剥離による加工が施されている可能性が高い。

(4) は、神戸市立博物館所蔵の十字架を担うキリスト図聖牌 (図 6-6-8 ①) であるが、図 6-6-8 ②のように、ガラス板は外れている。ガラス板の形状は楕円形で、4 枚に割れている。縁辺部の加工については、部分的に押圧剥離によるものと考えられる剥離痕が認められる。先の丹生出土資料のように連続した剥離痕が認められないのは、ガラス板の厚さに起因するものかと思われる。なお、本体部分に残る聖画自体も楕円形をしていることがわかる。

(5) は、日本二十六聖人記念館所蔵の 17 世紀のスペイン製聖遺物入である (図 6-6-9)。ガラス



図 6-6-5- ①



図 6-6-5- ② 上面



図 6-6-5- ③ 下面

図 6-6-5- ①、②、③ (1) 丹生出土ガラス板
(日本二十六聖人記念館蔵)



図 6-6-6- ①



図 6-6-6- ② 上面



図 6-6-6- ③ 下面

図 6-6-6- ①、②、③ (2) 丹生出土ガラス板
(日本二十六聖人記念館蔵)



図 6-6-7- ①



図 6-6-7- ②

図 6-6-7- ①、② (3) 磔刑のキリスト図 (片面 / 神の子羊図) 聖牌 (神戸市立博物館蔵)



図 6-6-8- ①



図 6-6-8- ②

図 6-6-8- ①、② (4) 十字架を担うキリスト図 聖牌 (神戸市立博物館蔵)

板を外して見ることはできないので、露出して見えている範囲でしか確認できないが、形状は楕円形で、断面は台形状になると思われる (図 6-6-9 ②)。つまり、聖画と接する面が下面で広く、露出する上面は若干面積が狭くなる。縁辺部が上面から下面にかけて斜めに傾斜する点では、丹生出土資料と同様であるが、丹生資料のような剥離痕は認められない。しかしながら、よく見ると、剥離痕らしき単位がうっすらと見えており、丹生資料と同じような押圧剥離を行った後、磨いて成形している可能性も考えられる。今後 16 世紀～17 世紀にかけて、こうしたガラス板の加工技術が行われていたかどうかについて、日本国内、西洋の双方において検証していく必要がある。

以上、楕円形の形状で断面台形状の形態は聖牌や聖遺物入に見られる形態と合致することがわかる。さらに、平らで面積の広い下面の下に銅版画等の聖画が置かれ、上面は表面に露出させる形態も合致する。上面には剥離痕が残っているが、構造上周囲の装飾でそれが見えることはない。こうした形態のために、聖画等が後に付着するとしたら下面の方に付着することとなる。さらに聖画自体が楕円形をしていることも多く、付着物が楕円形や弧を描く形状をなすと考えられる。こうした状況は丹生出土遺物(2)

で見られるように、下面に紙か繊維質のようなものが弧を描いて付着している状況と一致する。丹生出土遺物（1）は、上面、下面の双方に付着物が楕円状に付着しているため、上面については別の解釈が必要である。一つの可能性として考えられるのは、このガラス板は、備前焼の壺の中に、他の多数のキリシタン遺物と共に納められていたことから、一緒に壺の中に入っていた紙質もしくは繊維質ものが付着したことが考えられる。この際、聖牌や聖遺物入の露出しているガラス部分が楕円形であり、さらには、ガラスの周囲には金属もしくは、繊維質のものが楕円形状にとりつくために、他のものがガラス面に付着するときは必然的に楕円形状になる。

以上から、この丹生出土のガラス板は、聖画を納めた聖牌や聖遺物入のガラス板である可能性が高い。ただ、壺の中から発見されているのが、ガラス板のみである点は注意を要する。このガラス板が入っていた壺は、土中から発見されている。したがって、有機質のものは消失してしまった可能性がある。そのため聖画は付着物として残っているのみと考えられる。では周囲の装飾はどうなったかという点であるが、金属製の聖遺物入であれば、メダイが多数同じ壺から出土していることを考えると、腐食して消えたとは考えにくい。そうすると考えられるのは、周囲の装飾も同じ有機質の繊維質ものであった、いわゆる前述の神戸の資料のような聖牌であった可能性である。

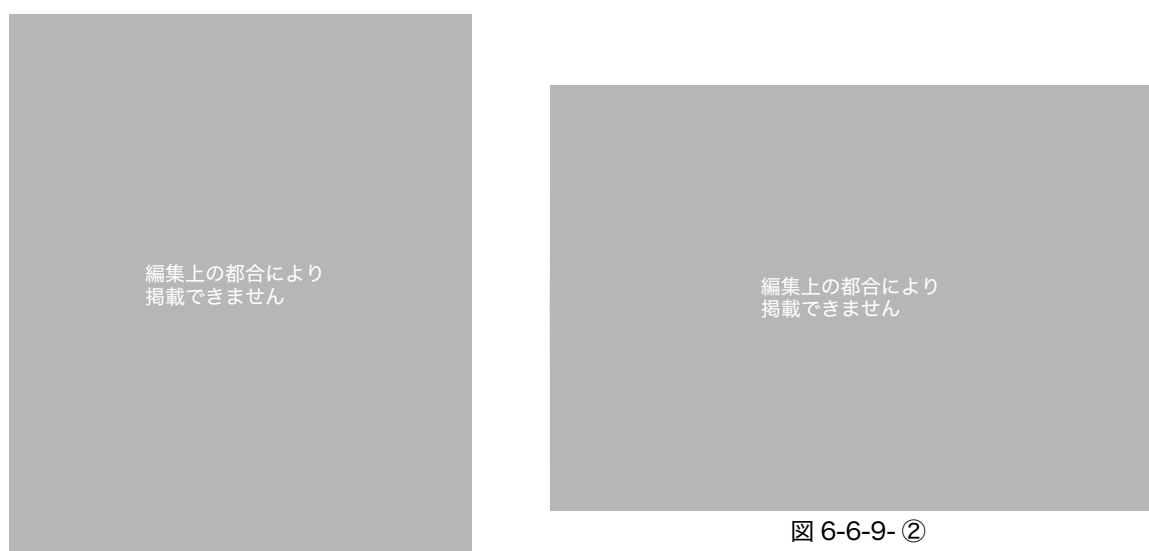


図 6-6-9-①

図 6-6-9-②

図 6-6-9-①、②（5）17 世紀のスペイン製聖遺物入（日本二十六聖人記念館蔵）

なお、丹生出土の2枚のガラス板は、その形状、サイズ、加工においてほぼ同形態であることから、通常聖牌は両面に聖画を入れてガラス板で覆う形態が多いので、同一個体の表裏につけられていたガラス板と考えられる。

以上の視点を踏まえて、千々石ミゲル妻墓所出土遺物のガラス板についてみてみよう（図6-6-10①～④）。

形状は楕円形と考えられ、3分の2ほどを欠損している。現存している部分で横2.7cm、縦1.3cmである。縁辺部を押圧剥離している関係で、断面は台形状をなす。加工痕の残る方を上面、平ら部分の方を下面とすると、下面に楕円形状にうっすらと黒色の痕跡が残っている。何かが接していた痕跡と考えられる。

この千々石ミゲル妻墓所出土遺物のガラス板を先の丹生出土ガラス板と比較してみると以下のようになる。

①形状はともに楕円形で共通している（図6-6-10⑤）。サイズは千々石ミゲル妻墓所出土遺物の方が3分の2ほどを欠損しているために、正確には把握できないが、合わせてみるとほぼ同サイズである可能性が示唆される（図6-6-10⑥）。

②加工については、共に押圧剥離によってなされており、共に断面台形状をなす。加工痕の残らない平らな面（下面）の方に、丹生出土遺物は紙のようなものが付着しており、この面が聖画に接していた面と考えられるのに対し、千々石ミゲル妻墓所出土遺物の方も下面に何かが接していた痕跡が残っていることから、この点も共通している。



図 6-6-10-①、I -2（表）



図 6-6-10-②、I -2（裏）



図 6-6-10-③



図 6-6-10-④



図 6-6-10-⑤



図 6-6-10-⑥

左：丹生出土（日本二十六聖人記念館蔵）
右：千々石ミゲル妻墓所出土遺物

図 6-6-10-①、②、③、④、⑤、⑥ 千々石ミゲル妻墓所出土のガラス板

以上から、千々石ミゲル妻墓所出土遺物のガラス板は、キリシタン遺物である丹生出土ガラス板と形態的にも、技法的にも共通しており、非常に近い性格のものであることが考えられる。さらに言えば、丹生出土のガラス板が聖牌のものである可能性が高いことを勘案すると、推定千々石ミゲル妻墓所出土遺物のガラス板も同様のものである可能性が示唆される。

以上、類例資料とガラス板の両側面から検証した結果、千々石ミゲル妻墓所出土遺物はキリシタン遺物である可能性が高いと考えられる。さらに、具体的には、その残存状況から考えると、神戸市立博物館所蔵の笹打ちのキリスト図聖牌のようなものであった可能性が指摘できる。

本稿を成すにあたり、神戸市立博物館の塚原晃氏、日本二十六聖人記念館の宮田和夫氏、大浦天主堂キリシタン博物館（当時）の大石一久氏には様々なご教示・ご助言・ご協力を賜りました。心よりお礼申し上げます。

（ごとう こういち 大分県立埋蔵文化財センター所長）

参考文献

- * 後藤晃一『キリシタン遺物の考古学的研究－布教期におけるキリシタン遺物流入のプロセス－』溪水社 2015 年
- * 後藤晃一編特別展解説図録『キリスト教王国を夢見た大友宗麟』年大分県立歴史博物館 2015
- * 岡泰正・成澤勝嗣編『南蛮美術セレクション』神戸市立博物館 1998 年
- * サントリー美術館・神戸市立博物館・日本経済新聞社編『南蛮美術の光と影 泰西王侯騎馬図屏風の謎』日本経済新聞社 2011 年